

外國軍事情報員

泉鏡花作

全一章

「掏られましたか。」

「もう、盗られたんですか。」

右左から問ふ者も、問はるゝものも、席を得ず、押し合ひ込み合ふ列車の中に、動きもならず立つて居る。

時に午後九時四十分、臨時發の東海道上り汽車は、此の米原で、今や、同じ日の午後三時頃より殆んど七時間の間待ち飽倦ねて、中には旅籠屋の二階で一寢入した連中さへある。數百名の乗客を一時に収容したので、動揺を作つて押寄する人數のために、列車々々の戸口々々は、恰も潮の低きに流れて、こゝに渦巻く風情である。

尤も二等の乗客には、改札口で豫め注意があつて、室は設けてあるけれども、臨時發の此の汽車は、等級の差別に因つて、相當の待遇は出来ないといふことを斷つたくらゐであつた。

扨て掏賊に抜かれたのは、法然天窓で前垂がけ、縞の羽織を被た、骨董屋風の男であつた。餘りの雑沓に、あがきも随意ならぬ手を帯に差入れ、時計の鎖のだらりと下るのを、ちやら／＼ちやらと鳴らしながら、

「はあ、否、手前が間抜けからでござす、何貴客、大したものぢやござせん、雑と手前年配ぐらゐな古時計でな、はあ、何も惜い品ぢやござせんが、久しう持馴れましたで些と此處ン所が、何うも、もの寂しうござす。それにな、満更氣が附かんではなかつたで、ぐいと、捻ぢられるのを存じながら、壓されて身動きもなりません、此處へ入らうとする途端で、片一方は戸口へ摺り、片手には荷物をな、離せば倒れさうで、これは！と思ふ内に、マンマと首尾悪く抜かれたでござす。」

「飛だ御災難で。」

「見す／＼やられたですな。」

「残念でしたな。」

「何、皆様。」

と仔細なく挨拶したが、しかし何となく物足りな

さうな顔色で、法然天窓を、人いきれで薄暗い電燈に、ぼんやりと照された。思出したやうに、

「いや、しかし誰方も、お氣を注げなさらんとなりませんぜ。」

「恐い、恐い！」といきなり大聲に叫んだのは、小兒を負つて、室の眞中、肩と肩とに挟まつて色白に肥つた身鱧を壓されながら、ぱつちりした目をぱちつかせて居た三十ばかりの大年増。次郎長が乾兒の小姐か、田舎茶屋の女房といった風、冴のある高い調子で、

「恐いよ、串戯ぢやないよ、掏賊が入つて居はしませんかねえ、それだと小兒は負つて居るし、懐中も帯もからあきだから、すぐに盗られて了ひますよ、とうしませうねえ。」と連もないのに大聲の獨言。

「これはしたり、そんなことをおいひなすつちや、教へて掏らせるやうなもんだ。」と隣に立つたのが、深切にたしなめる。

「だつたつて貴客何ぢやありませんか、おゝ／＼

誰がよ／＼。」

折から泣き出した背の兒をすかさうと、年増は眞赤な顔をした。大勢にせばめられて、肩を揺ぶるさへ容易くないので、

「何しろ、お届けなさるが宜しからう。」と脊のひよろ／＼と長い、洋服扮装の一名の紳士は、下にも置かれず革靴を提げたまゝ、又被害者にいつた。

「はい、否それには及びませんでござす。」

「しかし届けた方が可うございますよ。」と最も窓に近く立つて居た銘仙づくめの商人も少いが實體な心がけ。

折から窓下に來て、手提の瓦斯を、車のあたりに差向けた驛夫を呼んで、代理人は其の口から次第を語つた。

列車の内の熱鬧に似ず、プラットホームは寂然として、雨上りの風冷たく、驛夫は頭巾を被つたまゝで、

「此室へ入りがけに拘られたですか。」と、灯もまばらな暗夜の中、衝と爪先へ瓦斯を下して赤い

灯影を此處彼處にちら／＼と印しながら、列車に沿うて透し見た。驛夫は何等か掏賊の手懸りを得むとするものゝ如くであつたが、しばらくして、

「あゝ、此處に捻切つた環がある。」

「どれ、ございましたかな。」と件の窓に近い訴訟代理が、手を出して取らうとする。驛夫が再度手提の瓦斯燈を掲げた時、ぐツと重く引いて、づる／＼と汽車は出た。

響と／＼にも、どツと乗客は前にのめつた。のめつたかと思ふと、反動で立處に後に反つた。腰も堪らず、右に踰踉めき、左に雪頹れて、一發の聲を擧げた。ドント尻餅をついたのもあれば、顛合せさへしたのがある。

例の女房は金切聲で、

「あれ、どうかして下さいよう、呼吸が留る！
と些と仰山。」

さて此車體の動搖は、掏賊とは何の關係もない。汽車が格外の重量を曳いた惰力であつた。停る時も又同一で、汽車は停車場に發着の都度、乗客の叫喚

と轉倒は、一方ならぬ騒ぎであつた、が、二度三度、
やがて留まつたのは関ヶ原、其の揺れ方は一通でな
い。立つて居たものゝ芻ね上げられたのさへある位、
大濤の人を洗ふが如く、西瓜船の地震に似て、左右
前後、天窓が上になり下になり、わツとばかり聲を
あげたが、これまではやゝ暫時鳴りが留まらなかつ
たのに、唯此の驛に於てのみ、一騒ぎ聲を揚げたと
思ふと、寂寞とした。

同時に哄と萬歳の聲、野に満ちて、笥に響いた。
擦れ違つて下りの汽車が停まつたのである。數千
の兵員彼處にあり。

故あるかな、汽車の其の窓明りも、我が客車の此
に比して一種森嚴なる光を放ち、玲瓏として暗の古
戦場をぞ射たりける。

劍を握つて、椅子にかけたも見え、窓際にゝんで
巻蓑を燻らすあり、肱を支きて外面に顔を出せるあ
り、唯見る透通るが如き電燈の影に、肅然として、
姿清く面正しき幾多の戦員、將となく卒となく、黒
き征衣は羅紗ながら、神采鐵の鎧の如く、膚につけ
たる襯衣の色は白銀の鎖帷子を纏へる感あり、胸に

肩かたに燦さん々たる、徽章きしやう勳章くんしやうのきらびやかなる、眞珠またまこ黄金こがね以もつて飾かざるに異ことならず。鐵車てつしゃ一列れつの雲くもに駕がして、天兵てんべい光ひかり爽さわやかに、珠たまの音おとと劍けんの音おとと、床ゆかに、袂たもとに相あひ觸ふれて、時ときに戛かつ然ぜんとして調高しやうたか矣し。

「萬歳ばんざい！」

時ときに室しつの一隅いっくより、今乗組いまのりくみの一同どうが同音どうおんに萬歳ばんざいを三唱さんしやうして、一度ひとたび寂寞ひつそとなりたる折をりから、一聲ひとこゑ高く、奇異きいなる音調おんてうを以もつて祝しゆくするものあり。

諸人しよにん驚おどろいて是これを見みれば、右みぎなる腰掛こしかけの、最もつともすみなる薄暗うすくみき所に、丈高たけたかき一個ひとこの人物じんぶつ、鼻隆はなたかく、髮赤かみあかく、白面はくめんにして髯ひげを蓄たくはへず、鼠色ねずみいろの鳥打帽とりうちぼう、箱ひきしを横よこざまにしてぴたりと低ひくく、然しかも無雜作むざふさに被かぶつたが、其その長ながき脚あしを屈かゞめ、肩かたを窄すぼめ、窮屈きうくつさうに、左右さいうの腕うでを組違くみちがへて、窓まどに凭よりかつて、眠ねむるが如ごとく煢然けいぜんとして控ひかへて居あたが、一同どうの祝聲しゆくせいを聞きくと齊ひとしく、其その碧あをき目めを輝かゞかして、腕うでを解といて手てを舉あげて、

「萬歳ばんざい。」

いひ得えて可よ矣しと思おもへる如ごとく、更さらに、

「萬歳ばんざい、」と繰返くりかへして、微笑ほゝゑみながら四邊あたりを視なが

めた。

渠は此のために注意されて、誰ぞ話しかくる對手
やあると、求むるが如くであつた。

「おゝ、萬歳です。」と應じたのは、件の外國
人の傍に、是も小くなつて座を占めた、つむりのて
ら／＼に禿げて、頸に一揃の毛を撫で附けた燕尾服
一着の老紳士で。

外國人は此方に向くと、満面に活氣を帯びて、然
も嬉しさうに、快活な調子で、立處に高く、數十言
を語つた。

乗組一同、特に口づけに不平を鳴して、混雜動
搖斯の如くむば、正に其の命の危いことを語りつゝ
あつた女房さへ、偏に目を注ぎ耳を傾たが、解する
ものは一人もないのであつた。

外國人は一息口切つて、極めて覺束ない日本語で、
「ワカリマシタカ。」

「は、」といつて、斜めに身軀を差寄せて、筒
服の膝に手を支いて、耳を傾けて默然となる。

「ワカリマシタカ。」
と念を入れて、外人は老紳士の様子を見たが、
「オゝ、ワカリマセン。」

誰が目にも此の老紳士の消し得なかつたことは其の様子で知れた。

外人は又繰返しつゝ語つた。談話に擧動のともなふのは、凡て此の人たちの習であるが、此の時は一層で、殆んど身を揉んで、手足で書き顯はすかと思ふまで、働いて言つたのである。さて、

「ワカリマシタカ。」

「は、」といつて、目を眠つた切。

外人は更に四邊の人々を二したけれども、一人の是を解したものがなかつたので、胸を伸ばして、腕組をして、仰向けになつて黙つた。

けれども、到底語るに足らずとして打棄つた態度ではない。自國の言語を弄しつゝ、通ぜぬ紳士に煩を及ぼすことの氣の毒なのを覺つたやうな極めて慙なるものであつた。

しかしなほ、彼等か謂はむと欲して能はざる如き、思ふことある顔色であつたが、やゝあつて又前に乗出し、片手を上下に、上げ下げして、辛うじて覺えた日本語を、調子を取つていひ出した。

「小サイ、日本、勝ツ。大イ、ロスキイ、」と
顔を振つて唄ふが如し。

「然矣。」

と唐突に答へたのは向う側の椅子にかけた、當世の束髪で、年は少いが、風采は産婆に肖た、色の黒い細面の婦人で、其の傍に烏打帽を正しく被つた、京阪風の同伴が居た。

外人は、所謂、ブロンドなる目で、其方を見たが、莞爾して、實の通じたのを喜ぶ面色、更らに朗な調子で、

「小サイ日本勝ツ、大イ、脳随。大イ、ロスキイ負ける、小サイ脳髓。」

一同、萬歳と稱へた。汽車は分れて出たのである。

例の動搖は此の驛でも免れなかつた。騒いで鳴り留まない内に、渠は英國人なり、渠は新聞記者なり、渠は戦時通信員なり、渠は名家なりといふ聲、誰がいふともなく、語るともなく、人々の耳に傳はつて、やがて爾ある事に確められた時分に、汽車は安らかに進行しつゝあつた。恐らく次の室、なほ其の次の

室、或は遠き最後の室あたりから、逆に此處に傳へられたのであるかも知れぬ。列車は各室いづれも連續した上に、便所の前といへども隙間といつてはなかつたから。

多勢の喧噪中、記者は自若として、澄まして、其の衣兜から取出した手帖の一面にさら／＼と鉛筆を走らして居たが、筆を擱き、又衣兜の中に入る／＼もに、手帖を縦に取つて目を通して、直ぐに向うへ向けて持ち直すと、半身をづいと出して、衝と彼の束髪の手に渡した。

猶豫らはず請取つたが、唯打視むる、顔を寄せて、連の男も差覗いた。婦人が人指で字をついて、づつと横に棒を曳くやうにして、何かは知らず頷くと、男もぢろ／＼と見ながら夥度頷いた。

是をや／＼久しうして、衣紋を繕ひ、

「はい、」

といつて返すと、先刻から舊の位置に返つて、老紳士が額をおさへて俯向いた隣に、きよる／＼天井を仰いで居た通信員は、慌しく又腰を屈めて、慇懃

に申請つゝ、

「ワカリマシタカ。」

「然矣。」

とばかり澄ましたので、通信員は、きよとんとして照れた顔。手持不沙汰なことであつた。しばらくして、

「オカミサン、」と何かいひかけよう、我が記した此の言は、たゞ一の然矣を以て、打棄てらるべきものでない、その不平を訴へようとしたのであらう。先づオカミサンなる名稱を以て呼びかけると、婦人はツンとして、シヤンと反り、

「否、オカミサン、ありません。」といつた。

通信員は目をニツた。

やがて美き手の甲を見せ、婦人の前に差出して、コトと其の自分の指環を突き、

「アナタ、指環、コゝ。オカミサン、アリマセンカ、ワタクシ國、一、二、三、四、」

と規則正しく數へながら、一ツづゝ指を壓へて見せた。又二の腕をぐツと掴み、手首を丁と握つて見せたは、腕環を仕方で嵌めたのである。

「タクサン、ハメル。ケレドモ、オカミサンデナイ、コゝ、ハメマセン、アナタ、ユビワ。」

と別なる指、又トンと突き、「コゝハメル、オカミサンアリ、マセウ。」

如何にと、屹と見上げたが、婦人は不愛想にかぶりを掉つた。

通信員よ、是は、我が同胞の觀る處も亦、貴下と同一である。けれども貴下は過失つた。如何にも彼の婦人の指環は、貴下の國に於ても、又我が國に於ても、既婚の女子の飾り方である。けれども婦人が、指環の用ひ方を過失つたよりも、尚大なる過失が貴下にある。前髪の立つた束髪、恁の如き風采の貴婦人は、是を女房さんといつては成らぬ。宜く夫人といひ、奥様といふべきであつた。

外來の客は然りとも知らず、尚婦人の服さないのを見て、熱心に、

「ワタクシ、カミサン、モチマス。オトコ、ユビワ。」

といひかけて、首を回らすと、實例に用ふべき適當な美人が居た。

あらい矢緋やがすりの袷あはせをだらしなく着きて、高島田たかしまだのおく
れ毛けを亂みだしたが、胸むねのあたりまで、前褸まへづまを高くかゝ
げた、恰あたかも裾すそを端折はしよつたやうに、燃立もえたつ緋縮緬ひぢりめんの長なが
襦袢じゆばんは、惜氣をしげもなく、胸むねのあたりまでちらめいた。
此この娘むすめの恚いかう高々たかたかと褸つまを取とつたのは何なんのためか分わけ
らない。或あるひは落ちて來きた梅川うめがはであらうといひ、或あるひは惡わる
漢ものに手籠てこめにならうとした庄屋しやうやの娘むすめであらうといつた、
けれども、其その二三せつみなひの説せつ皆みな非ひなり。何なぜ爲ななら、高足駄たかあしだ
を穿はいて居ゐるから。

「ムスメ、ヤル、ハメル。」といひつゝ無雜作むざふさ
に手てを伸のばして娘むすめの指ゆびを取とらうとすると、
(ちやつと) なる鱧ていで、慌あわたしく、衿ゆきの長ながい然さら
ぬだに手ての隠かくれさうな袖口そでぐちへ奥深おくぶかく引込ひきこんだ。花はなは
つぼんだ、葎しへはかくれた。而しかして、又また、褸つまをぐいと、
眞赤まつかに上あげるのをキツカケに、胸むねをくねつて、ツン
トひぞる。

記者きしやは茫然ぼうぜんとして、アツと口くちを開あいたが、カラノ
ゝと笑わらつた。

片手かたてで袖そでを曳ひく形かたち、片手かたてでハタと掉拂ふりはらつた形かたちして、
「コレ、ニツポン、何なに? 犬いぬ、ドツグ、猫ねこ、キヤ

ツト、ザル、モンキイ、ザル、モンキイ。」

「貴客、猿でございます、ざるではありません。」
と老紳士は傍からいつた。

振りむ
振向いて打頷き、

「アリガタウ、サル、サル。」

といつて、又獨り頷いて、よく其の記憶に印した
ことを面に表はし、

「サル、モンキイ。」

目を指して、

「アイ。」

といつて天窓を叩いた。

「ヘッド。」

すぐに口を壓へながら、

「マウス？」

「口、」と教ふるものあり。

「口、口、マウス、目、アイ、天窓、ヘッド、サ

ル、モンキイ、犬、ドツグ。」

といひながら、更に袖を引き、振拂はれた仕方を

して、

「コレ、何？」

ふられる、ふられる、ふられる、と四五人口々にい

つた。

「オ、ワタクシ、フラレル。」とて、鬱いだ顔をしなから、丁ど其時、憚へ行かうとして、記者の前で、ひよろ／＼蹠跟けかゝつた、老爺の腰を、長い腕でひよいと抱いて留めながら、「フラレ、マシタ。」

と又高らかに笑つたが、酒々、落々として掬すべき態度であつた。

名古屋へ着くと、厚きオウバアコオトをしつくりと身に纏ひ、鳥打を、一文字の鍔の浅い帽子にかへて、肅然として立直つたが、荷物は持たず、太き杖を支いて、づらりと見渡し、

「皆サン、サヨナラ。」と衝と下りた。

「然らば、外國の紳士、健在なれ通信員。」

と滑かにイングリツシユで聲をかけたのは、隣の室から窓を覗いた、一人の學生であつた。學生は、はじめから様子を知つて、言を交はさうとしたけれども、人ごみのために室をかへることを得なかつたのである。

おほまた 大股に歩いたのが、プラットホームで引戻され
たやうに、すつくと立つた。通信員は振向いて、帽
を取つて、前途を祝した學生に對し、莞爾として恭
しく一揖して、其まゝ、しばらく人の中に、脊の高
い姿が見えたが、やがて美しき中京の灯にまぎれた
のである。

【完】